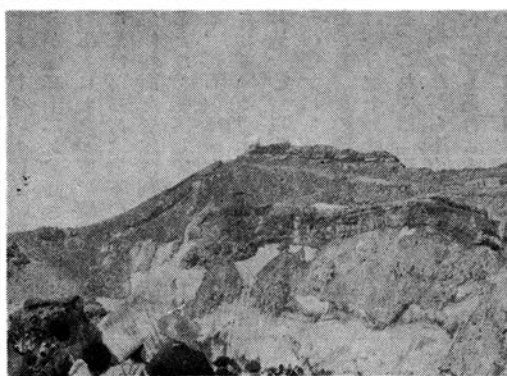




富士山山頂火口付近／撮影 小倉厚

私も日本人の湯仰して止まな
い富士山で、昨年夏(一九八〇年)
おきた落石事故は唐突であり、白
星に悪夢をみているような悲劇と
なった。曇天と雨天の続いた冷夏
であったが、あの頃だけ珍しく好
く晴れていた。それなのに
お盆の八月十四日午後一時
四〇分頃、突如吉田大沢を
落石が転がり下ったのであ
る。落石は下山道を歩いて
いた多数の登山者に降り注
ぐようにぶち当たり、薙ぎ倒
して、十二名の方が亡く
なり、三十一名もが重軽傷
を負われた。瞬時に起きた
大規模な山岳遭難であった
が、犠牲者はアルピニスト
でもワンダーでもない、
夏休みを利用した家族連れ
や大縁年にちなんのお山
参りで登りに来た方達とい

うのが特徴であった。
普通「落石」と言った場合に
は、急な斜面で先を行く登山者が
浮石を踏みそこねて落とし、落ち
た石が地面にぶつかってまわりの
石をささいながら撓め飛んで来
る。岩場で手懸りに掴んだ岩が、
そのまま石屑に砕けて落ちること
もある。登山者が気が付けばとっ
さに「ラクセーキ」と叫んで下に
いる人に伝えるのが、山でのマナ
ーである。落石は石ばかりとは限
らない。高い狭い稜線に置いたつ
もりのリュックサックが、そのま
ま安定を失い止める間もあらせ
ず転がり落ちて、下の石をひきこ
みながら落石になってしまふのを
見たこともある。こうした人為的
落石に限らず、自然の落石も折々
見かける。岩壁や裸地の斜面には
日射や霜の作用が強く加えられて
風化が絶えず進んでいるとみてよ
い。春の浅い頃、陽当りの乾いた
岩屑斜面をカラカラ音を立てなが

ら小石が幾つか落ちてゆくのも自
然の落石の一つの型である。
今回の落石はこうした規模の小
さいものではなかった。頂上噴火
口を囲む頂稜の富士八峰の一つ久
須志岳頂上直下の北東側に向く崖
の一部が崩落し、崩れた岩体はた
ちまちま直径一、二メートルの石
塊に砕けちまわった。吉田大沢の
谷底を急速に転動し砂
煙りを舞いあげて奔り抜けた。吉
田大沢は東京から望んでもはっき
りと判かる富士山を頂上から刻む
侵食谷の一つで、浅く窪んだ形に
特色がある。それでも西の屏風岩
尾根と東の吉田登山道尾根が夫々
溶岩層の岩稜であるのに、その間
の吉田大沢は谷底の幅三〇〇〜五
〇〇メートル、両尾根の沢側に露出
する崖の高さが四〇メートルもある明瞭な
凹みで、谷底は砂や石礫で蔽われ

悲劇の原因は何といっても久須
志岳の崖である。高さ三〇〇メートル、割
目が多く多孔質の溶岩層で水を含
み易い。その上、下部がえぐれて

夏富士でおきた

落石災害

式 正 英



1981年(昭和56年)

2月号(No. 428)

社団法人 日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価一部 150円

目 次

- 夏富士でおきた落石災害
(式 正英)(1)
第18回『この一本展』(1)(2)
日本を初めて訪れて(2)
(ノエル・E・オデル)(2)
京丸牡丹考(下)(山本朋三郎)(4)
東西南北(5)
「底倉記」と矢倉岳
土曜会へのお誘い
北の山雑感
図書紹介(6)
「ギネス登山事典」「足で歩いた百観音」
「高い山々と冷たい海」
委員会報告(8)
雪の八子ガ峰で忘年会
(自然保護委員会)(8)
『山岳』追悼欄について(9)
お知らせ(9)
(指導委員会・遭難対策委員会)
(図書委員会)
会務報告・ルーム日誌・会員移動
.....(9~11)
図書受入報告(図書委員会)(11)
カット／芳野満彦・松本慎太郎

- ▶日本山岳会事務取扱時間
月、火、木、土曜 10時〜20時
水、金曜 13時〜20時
日曜・祭日は休み
▶図書室開室時間
日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時〜20時

「砂走り」と称されている。吉田
大沢の勾配は最上部で四〇度、下
部(海拔一五〇〇メートル)で一五度、
その間次第に勾配を減じており、
あの富士山の指数曲線状のシルエ
ットの示す山体傾斜と殆んど平行
している。谷ではあるが西側の大
沢のように水流によって深く刻み
込まれたような種類ではない。
落石の痕跡は、その谷底中央に
幅約五〇〜一〇〇メートル、水平距離二
五キロ以下まで跡付けられた。つ
まり落石の末端はお中道を越え
て、縦沢林道近くまで達したので
ある。被災者達は八合目から下山
道がトラバースする三三〇〇〜三
一〇〇メートル付近、七合三勾の三〇〇
〇メートル付近、七合より下の二七〇〇
〇メートル付近、六合目雲海荘上部の二五
〇〇メートル付近で夫々別々に遭難され
た。「落石」の叫びも地響きと落
石の速さに打ち消されたに違いな
い。被災者の高距分布の異常に広
範なことがそのことを如実に物語
っており、この災害の恐ろしさの
特色でもある。

留守番電話(電話番号231-六六五九)

オーバーハンクしている。その部分が幅二十二メートル、高さ一〇メートル、奥行五メートルにわたって、突如あの時刻に抜け落ちた。崖下の四十二度の急傾斜面を岩体は割れ砕け止まることなく転落していったのである。落石量は一七五立方メートルと推定されている。水を含んだ土石流で秒速一〇メートル以上、乾燥地では秒速一〇〇メートルに達することがあることから、この時の落石は秒速十数メートルから数十メートルあったと想像される。これでは「砂走り」に半ば足を埋めながら下山中の人達は気が付いても避けようもなかったであろう。こうした規模のものをただの「落石」という範疇に入れるのは問題である。久須志岳の崖は幅が一五〇メートルあるが、その内二十二メートルが剥げ落ちたのだからこれは自然に言って「崩壊」である。そして動いた石は「岩なだれ」と呼ぶにふさわしい。一時は人為的落石のような説も出たようだが、「落石事故」という語に惑わされての臆測に過ぎないと思われる。「岩なだれ災害」と表現した方が実情に合っているように思う。

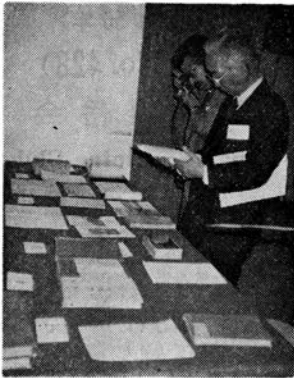
吉田大沢のように河流のない浅い谷でも物質の移動は常に起きていると考えてよい。石礫が徐々に進行するクリープ、堆雪の徐動、雪代水（融雪水）による物質の運搬そして雪崩がある。富士山での雪崩による災害が吉田大沢に顕著であることは注目し値する。一九

五四年十一月二十八日、吉田大沢八合目でおきた雪崩で、大学山岳部のパーティ三十九名が遭難し十五名が行方不明になった。また一九六〇年十一月十九日にも吉田大沢の九合目から六合目にわたり雪崩が発生、五十五名が遭難し十一名が死亡した。このようにこの沢は一種の雪崩道と考えてよい程、雪崩の常襲地である。一九八〇年十一月二十四日には、冬山訓練中の登山者で賑わっていた吉田大沢の七合目で再び落石があってその内一人が亡くなった。吉田大沢の自然は夏も冬も取り付き易いにもかかわらず、実は苛酷な性質であることを裏書きすることになってしまっている。

一年、一九六六年の八回あり、地震による崩壊の記録は、一三三一年、一七〇三年、一九三三年と三回ある。こうした記録の折の崩落物質がすべて吉田大沢を通過したわけではないが、むしろこうした記録よりもずっと頻繁にこの沢の中を物質は転がり動き、その折居合わせた人には突然の形で襲いかかって来ると考えておいてよい。吉田大沢は歩き易い浅い窪みながら、物質の移動し通過する場所なのだから、下山道を敷設するべきではないし、雪上訓練のグレンデとしても適当とは言えないのである。「落石注意」の立札も、ハイウェー沿いのものとは本質も内容も異なるのだから、錯覚をおこす恐れのある注意札の表現も改めたいものである。（一九八〇・一・三〇）

（落石事故に関する基礎的資料は山梨大学、浜野一彦教授より提供していただいたものを使用した。紙上を借りて厚く感謝したい）

第十八回『この一本展』より（一）



「この一本展」展示会場風景

恒例の第十八回『この一本展』のことは前号会報総会関係記事の欄でお知らせしましたが、ここに出品者の方々から寄せられた解説原稿を逐次掲載し、当日会場に来られなかった会員諸氏をも含め広く参考に使います。

（図書委員会）

日本を初めて訪れて（2）

ノエル・E・オデル

・上高地での語らい

大甲を下り京都、奈良を回って上高地に行きました。此処でも天候は悪く大雨に遭い、山々の頂を望むことはできませんでしたが、この旅が興味深いものとなったのはこの地で沢山の人々に会えたからです。日本の登山家に加え中国登山家の一行も対面しました。彼等は日本の登山家達の招きで、幾つかの中国の山に登征する可能性を話し合うために来日したのですが、中国には未踏の素晴らしい山々が沢山あり、登山の面でも大きな発展の可能性を秘めていると思います。中国隊の人々とエベレスト登山の話をしたこと、それに加えて今年二つのルートからエベレスト登頂に成功した日本隊の人々とエベレストについて語り合えたことはこの旅の中で最も忘れ難い出来事でした。日本隊の二つのルートのうち一つは私が参加した一九二四年の一九三八年、英国隊が試みたのと同じルートです。チベットに向かってそそぎ落ちたようなエベレストの山肌を幾多の困難と危険を克服して登った。日本隊員の話は特に印象的でした。何故ならば我が国が当時エベレスト登山を試みるにはこのルートしか許可されていなかったからです。昔は北側経由でエベレストの南側に回ることが不可能だったのですが、今はこのルートを試みる隊が多く、後にロードの位を与えられたジョン・ハントの率いる英国隊が一九五三年、ついに我が国がエベレストと呼んでいる山を征服したのもこのルートからでした。この時世界で初めてこの山頂に立ったのがヒラリーとテンジンで

すがこれはまさに快挙でした。と言うのはエベレスト登頂は登山技術の上からも、酸素器具の携行を必要とする空気の稀薄さの面からも容易なことではないからです。昔も一部の遠征隊が酸素器具を携行しましたが、最近のように有効に使いこなすことはできませんでした。我々の時代には性能の良い器具や付属品はありませんでした。昨今ヒマラヤの高峰を目指す登山隊のために考案された極めて軽い器具などは望むべくもなかったのです。チベット側からの登攀のためにダライ・ラマから許可を受け、インドのダージリンからシッキムを経てチベットに入り、チベット高原を西へ向かってベースキャンプにたどり着きました。長い旅でした。そのために年が明けると早々まだ寒さの厳しいうちに出発しなければなりません。チベットの高地での寒気は特にひどいものでした。極地へ行った経験を持つ者は私も含めて耐寒性があつたように思います。ようやくロンブク谷に到着した我々はゴンパの長老である僧侶から素晴らしい歓迎を受けました。彼は非常に友好的で我々の遠征に興味を示し、このように辺鄙な土地の山に登るため何千里の道のりをはるばるイギリスからやって来た訳を知りたがりやでした。我々がスポーツとしての登山を目的とするだけでなく、聖なる山を訪れる巡礼でもあるとの説明に彼は満足したようでした。これは東京、大阪、その他各地の日本山岳会の集まりでお話しました。

・私は日本を離れたい

京都でも山仲間やそれ以外の方々ともお話できたのは幸せでした。またこの古い京都で神社仏閣、その他いくつもの美しい建造物を観ることができました。奈良にも案内されこの

一、山王真形

大石 周我著
文政五年版

最近ある古書展の山の本の販売目録に、写真入りでこの書物が載っていたが、元来は折りたたみの画帖であったのが、あとの持ち主が表装し直して一巻の巻物にした。これが私の手に入り、ここに展示した次第である。

この本については、鳥水がその著「偃松の句ひ」に「富士山の雲の画家」として、実に要領を得た、興味あふれる一文で紹介されているので、私が改めて詳しく記しても、とても鳥水のそれに遠く及ばないので略させていただきます。この本に序文を載せた著者の友人の毛弼という人のことも、著者である大石周我のことも、私は私なりに調べて見たが、鳥水の記している以上のことはわからなかった。

幕末、静岡近傍に在住、富士の姿をよく観察し、写生していた周我という人のためまめ情熱とその努力に敬意を表したい。その古稀の祝いから門人達が、書きためた富士の写生画のうちから三十三点を選び、奉書に木版刷りとし「山王真形」と名づけ頒布したものと冒頭の序文中に記載されている。

(周我は画だけの師匠だったのかわからないが、この画帖を見る限りでは図柄も用紙も彫りも最高の

ものとは思えない)

しかし、今でも時々古書市場に現われる本であるところを見ると(鳥水も当時そう述べている)版行当時は割合広範囲に頒布され賞玩されたものと思う。

その一例としてではないが、明治八年、日本に招かれ来朝したドイツの地質学者ナウマン(当時二十五歳)の目にこの書物がとまり、同氏が明治十八年(一八八五年)任期満ちて帰国、この本に載っている笠雲、三蓋笠の絵が学者としてのナウマンに不可解であったので、このことを独逸の気象学会へ照会したことがあった。これをたまたま我が国、物理学の泰斗でありかつ文人であった寺田寅彦(吉村冬彦)が知るところとなり、

現地でシュエーガと呼ばれる日本人画家のことをさがしていた。それが巡り巡って鳥水のところへの問い合わせとなった。鳥水も初めはわからなかったが数年後、この「山王真形」に古書展示会でめぐり合い、初めてナウマンの言う「シュエーガ」が「大石周我」であることが判明、解決された。このことも鳥水が前記の同氏著に述べておられる。

余談だが、ナウマンのことは鳥水の前記著書中に「地質学者ナウマンと森鷗外の論争」と言う論文で、ナウマンは在日中、日本人を人とも思われ振舞をした男だったようで、わが国の本州を横断する

大断層を発見し、これをフォッサマグナと命名した業績は有名な話だが、この呼び名はラテン語で女陰を意味するものと言われている(昭和五十五年十二月号 文芸春秋、森本貞子氏の「地質学の父ミルンの日本人妻」の文中より素人の私は初めて知った)異邦における俊秀ではあったが、一青年学者の客気の致らす命名としか思えない。

何はともあれ、この一篇の画帖が遠く欧州の学会の話題ともなり、それについて起きた問題の解明には、洋の東西の幾多の人々が関係したことを思い深い感慨を覚えるものである。

小島鳥水「偃松の句ひ」抜萃

「富士山の雲の画家」より
独逸の地質学者、ナウマンが、本国に帰ってから、富士の論文を、ミューンヘンの地理学会に提出した。その文中に、シュエーガという人が、富士山を觀察して、数多くの木版画を作っている。その中に、富士山の三蓋雲が描いてある、……

シュエーガの姓号は、大石周我である。大石周我の富士の木版画本は「山王真形」と題するもので、……

……
終りの方に問題の笠雲が描いてあるが、雲の富士だけは、雪の富士と違って、一々説明を付してある。……
石川 治郎

街の美しいたたずまいを眺め、これから建造物の美を維持するためにどんな方法がとられているかを知りました。日本には素晴らしいものがあります。これらの社寺の建築資材も、そして石でさえも時と共に朽ちて行きます。それを大切に保存し、必要に応じて修理しまた改修していくことは非常に重要であると考えますが、勿論日本の皆さんはその重要性を充分認識していることと思います。

このたびの日本の旅は本当に興味深いものでした。運悪くぐずついた天候が続きましたが、この夏は特別で夏とも言えないような冷たい雨の日が多く、低地ばかりでなく、低い山から一つ二つ登ってみたいと望み雨にたたられました。

再び東京に戻って友人の皆さんから温いお心づかいを頂いた私は、この国を離れたい気持で一杯です。しかし我々はいずれは自分の場所に帰り仕事に戻らなければなりません。私は今では教鞭を取っていたケムブリッジ大学を引退しています。ケムブリッジに帰って自分の研究を続ける積りです。

ケムブリッジのような大学には沢山の優れた人々が集って来ます。そのような人達と会うのも私の仕事です。余りケムブリッジのことばかり言うのはやめましょう。あちこちの大学に關係してきた我々のような者の中にも、この大学を世界一と考える

ている者がいますが、ケムブリッジだけが大学と言うわけではありません。私はカナダ、アメリカ、インド、ニュージーランド、それにちろんイギリスの六つの大学に教えたことがあります。

日本での幸せな思い出を抱いて私はイギリスに帰りますが、いつかまた、今度はもっと天気の良い時に日本に来ます。そして何よりも美しいこの国の山々を見たいと思います。私は山が大好きです。世界各地の山に登って来ましたが、私にとつて山は単にスポーツとして登るためのものではただでなく、人生にとつて偉大なものの一つなのです。日本人にとつてもそうであるように、山は人生に大きな意味を持っています。日本の皆さんが山を宗教的な対象物と考え、讃美し、尊敬すべき自然――または神と言ひ替えてもよい――として与えられた大いなるものとして崇拝して来た伝統に私は心から惹かれます。

――一九八〇・九・十二――

《訳者後記》
一九七八年二月ニューデリーにおけるヒマヤンクラブ五十周年記念式典に西堀会長のお伴をして出席の際、オデル博士にお会いし、以来文通を交していた御縁で、このたびのオデル博士訪日に際して歓迎委員会の事務を担当する西堀会長より御挨拶を受け、同博士の御世話をする光栄に浴しました。(吉田 宏)

日本を初めて訪れて(2)

二、登高会々報

第一号・第七号 登高会

慶応大学山岳部の部報「登高行」は、登山の資料に関心を持つような人なら誰れでも知っている

部報である。
大正八年七月に創刊号を出して以来現在まで十七号を数えるが、そのどの号を取っても、記録、研究、論文、随想など全てにわたって水準の高いもので、わが国の大学山岳部々報では第一級に属する

ものである。

この慶応大学山岳部出身の人々で作った会に「登高会」がある。以前よりOB会のようなものはあったようだが、会則を決め「登高会」として正式に発足したのは昭和八年七月である。その会誌が「登高会々報」である。戦前に第一号から第七号(昭和九年三月十六年五月)まで七冊刊行された。



信濃路の登山用具

「登高行」が山岳部の活動の成果を外部に発表するという態度で編集されたのに対し、この会報は、あくまでも会員の連絡誌といういわば部内誌的な、アットホーム的な考えで編集されたものである。ちょうど日本山岳会における「山岳」と会報「山」の関係に似ているといえる。

ただ第七号だけはそれまでの一号から六号までの内容とはかなり違ったものになっている。それは、会員豊田国臣、小森宮章正の追悼集、大島亮吉書簡、オラース・ベネディクト・ドゥソニスエール研究(一)などを中心に二百ページ以上

の頁数を持ち、質的にもたいへん高い会報になっている。

大島亮吉の書簡は「登高行」第十一号に中村邦之助宛が収録されているが、この七号には豊田国臣宛を中心に、山果、片山宛が収められている。

岩瀬 皓祐

三、鉄道旅行案内

鉄道省

大正十三年十月五日発行

印刷者 井上源之丞

出版印刷株式会社

松本、豊科阿保健所と信州大学への出張準備中に「この一本展」へ出品してもらえないか、と河野氏より依頼のハガキが数葉の郵便物の内より見つかり、一寸大袈裟な表現だが、慌てさせられた。生来江戸っ子のなんとやら安請け合いて後日赤面することは、日常茶飯事。今回もまたまた然り。本棚の背文字を順に追っていると、フトこの小誌のところで眼が停止、私の生年月日の約一カ月前に発売されている。当時としては官製お手盛りの洒落本で、類い稀なる一品、今昔の旅と比較するには、話の種、味覚……逸脱、自画自讃は、無智なるものの我田引水。ご許容下さい。

例一、日本北アルプス登山、筑摩電気鉄道松本より島々まで九哩八分賃金四十五銭 島々から上高地まで西北六里二十一丁、島々宿までは半里自動車三十銭。例二、

京丸牡丹考(下)

山本朋三郎

・京丸牡丹伝説の載る文献

京丸牡丹に関する古い文献として、「雲萍雜志」(煙霞綺談「遠山奇談」遠江古跡図絵)などがある。この中、天保十四年(一八四三年)刊、柳沢里恭著、「雲萍雜志」巻三に要約次のように書いてある。

「その地は、他より人の行かふべきところにもあらず国の境に、藤の蔓もて長さ五六十間もあらん……かけはしをかけたなり……行くにさへ目くらみ、魂きゆるばかりなれば、かの地へ行くものとはいと稀れなり……その地は家わづかに四、五軒ありて……稗にあづきをまじへて糧とす……麻の織りたるに尾花(ススキの穂)を入れた夜の物を出して、着せたるのみにて、敷けるものは家のあるじもなし」そして他人の見聞をまた聞きした記録として、

「ふたかかえもあるといふ木に、花びらの径一尺もあらうといふ京丸牡丹とよばれる花……色紅にして、黄をおびたる花今をさかりと咲たり。夏の事……この花ちりて流れ行けるを拾ひしものあり、花びらのわたり、一尺余もあるべしと語れり。いかなる木の花にか、たえて知る人なし。遠江の国人は、これを京丸の牡丹とて、今猶ありといふ。この頃に人のゆきかふことありて、この地へもいたれど、この花のある溪へ、尋ねゆきて見たる人なしとぞ」

このように実際に、確認した人はいない。京丸牡丹の伝説の花は、明治の頃までは、シャクナゲであろうとの通説が多かった。牧野富太郎

博士は、帯黄白色の大きな花をつける(ホオノキ)であろうと判断した。静岡県下の植物研究家の杉本順一氏は其著、「静岡県史蹟名勝天然記念物調査報告」第九集、京丸の牡丹の産地京丸の原始林(昭和八年刊)の中で、俗説の京丸牡丹は、「アカヤシオツツジ」「シロヤシオツツジ」「ヤマボウシ」などが牡丹花に属する樹名であることを明らかにしたが、正しい科学解決はできないと述べられている。

京丸牡丹の伝説を整理してみると、(一)六十年目に巨大な花が咲き、(二)色は白か紅である。(三)天保十四年刊の「雲萍雜志」より数百年を経た今日に到るまで誰一人として確認した者がいない。(四)植物学見地から京丸牡丹は「アカヤシオツツジ」「シロヤシオツツジ」「ヤマボウシ」らしい、と言うことになる。

「アカヤシオツツジ」「シロヤシオツツジ」の花は小さいが、「ヤマボウシ」の花より大きい。この三種の花も似たりよったりの大きさであって、突然変異的に巨大な花が出現することは考えにくい。一つ一つは小さな花であるが、密生することによって、大きな花と見ええられる花も、世の中には多くある。例えば良く見るヒマワリの花、アジサイ、うつき、沈丁花、七変化などの花も、一つ一つ小さな花の集合体で、知らない人には一個の大きな花のように見える。

同じように、近づけば一つ一つの花は誰にも判別できるが、遠くの方から眺めて、群生している木、またはそれに咲く花が、何等かの自然作用で花が密集し、ちょうど巨大な一つの花のように、丸味をもって群咲くことも考えられる。こんな時には、遠くの方から、特に霧やモヤを通して、向かいの谷間に見えたら、アカヤシオ、シロヤシオ、ヤマボウシなどの花も巨へ



「底倉記」と矢倉岳

織内 信彦

「底倉記」は雑誌アルプに二年ちかく連載され読者を魅了した。新刊「わが登高行」下巻にも終章の重要なパートとして再録されている。著者はいうまでもなく、われらが敬愛してやまぬ三田幸夫さんである。

「底倉記」は、大戦の前、印度にいて虎視眈々ヒマラヤ入りをねらっていた著者が、冬のロータン峠

華崎、白峰山、芦安村まで四里、そこで案内者を雇うこと、山は海拔一万二百十二尺、増富ラジウム冷鉱泉北六里、自動車五十銭、馬車四十五銭、俵一円三十銭、大豆乗馬四円、駕籠十二円等々。五十有年前、大正末期の旅は困難を極め、金銭的にも多大な負担を荷せられたものであろう。山行とはもっともゼイタクな旅であったと推測する。

諸先輩の経験談を聞き、質問し、歓談の座を広く深く味わう喜びに、小誌の頁を繰っていると思いを走らされる。戦中戦後生れの岳兄諸氏に「大正」は遠くなりにけり、とよく言われるが、往時と二十一世紀への道程を回想、追想、夢想と欲しいままにし、和洋折衷途上期の山旅を、登山靴を草鞋に履き替えたつもりでこの一書を高覧戴き、ご失笑いただければ幸いです。旅の案内書のガイド？をこれで終止。

十一月二十七日新宿発十二時十分普通列車松本行の車中にて稿を書く。

宇津 力雄

の踏査をやったあと、心ならずも異国での長い病院生活、帰国して更に予後の静養を送った三田さんゆかりの温泉郷、箱根の底倉を主舞台とする、幼少期から今日にいたる回想記である。

三田さんは、底倉をめぐる箱根周辺の山と人をこよなく愛し、折にふれて杖をひく。しかし、どういうわけか「足柄峠の傍らにうずくまる八六七の奇妙な山」矢倉岳には登る機会に出合わない。

「底倉記」には数か所もこの矢倉岳のことについてふれられていて、登りつくされた箱根外輪山の山々のうち、三田さんが最近までとり残してしまっていた、ある意味では縁の浅からぬ山であることがわかる。三田さんの久恋の山と言っては言い過ぎであらうか。このことを知っているわれわれ

大な花と見間違ふかも知れない。

天候の状態、体力、気力の減退によって、ありもしない物体が見えることがよくある。知ってしまったら、なんだと言う、幽霊の正体見たり枯尾花のような話や経験は、よく人のするところである。具体的に、京丸牡丹の樹木の太さや花の色、大きさ等が書かれてある、前出の「雲萍雜志」の記事は、著者が泊った宿の、物好きな下男が京丸牡丹を見に行ったが、確認することができず、言い伝えを聞いて来ての話が出发点である。いわば、あるらしい、そうらしい、と言ったことからのあやふやな出典からの出発である。

・京丸牡丹の正体は何か

では、ふたつかえもあらん、と思われると伝聞されているが、もし本当に大きな木に咲いていた京丸牡丹なら、牧野富太郎博士の言うごとく、ホオノキかも知れない。しかし、(色は紅にして、黄を帯びたる花)と古文書に書いてあるからには、紅色の花をつけるホオノキはな。この間の、くっつかぬ説明は次のように考えれば簡単に納得がゆく。

大きなホオノキが急斜面の谷間に原生しており、ホオノキの枝が急斜面の谷にふれんばかりに枝張りしているあたりに、紅色をしたアカヤシオツツジが、考えられぬ現象ではあるが、群がって花が咲き、うまい具合に群生した花が丸

味を見せ、ちょうど一つの花のように眺められた。しかも京丸牡丹を見たと言う人はちょうど霧を通して、逆光線でボンヤリした状況なので、写真の二重写しのように、ホオノキの枝先に巨大な紅い花が咲いているように見えたのではあるまいか。

山や広々とした野原などで、霧やガス、吹雪などで視界がボンヤリすると、遠近感や物の大小が正常時にはとても考えられぬほどに狂ってしまうことがある。ふと見たのに、遠くに巨大な岩が露出している、と思ったのに、ガスが晴れてみたらすぐ近くの雪渓に転がっている小石であつたりする。小さな光もガスの間を通ると光曲折して、ボンヤリと大きな灯りに見えることもある。

あり得ない巨大な花は毎年咲くものではない。見たこともない巨大な花は六十年目に咲くと言われる。このことは、熊笹が六十年目に枯れると良く言われているが、根が張り合って、栄養をとることができにくくなって枯れるのであつて、六十年周期説は長い間には枯れる、と言った意味で言われるものと考えてよいだろう。

京丸牡丹の六十年周期説も、長い間には、誰かが錯覚してか、ありもしない巨大な京丸牡丹を見たように、またいつかは錯覚による、巨大な京丸牡丹が咲くであらう、との意味での、六十年説の言い伝えと考えれば納得がいく。

京丸牡丹(下)

た。静かな疎林の小径が続き、そしてカヤトの切り開きをひと登りすれば山頂である。

ちぎれ雲ひとつない快晴であつた。季節が季節だけにさぞ寒むかろうと、アノラックやウインド・トルーザーまで用意してきた人も

いたが、頂上は裸になつてもよさそうな冬らしからぬ小春日和だ。富士が秀麗な全容をみせてわれわれの眼をうばう。持参の弁当をひろげ、河野氏がかついできた立派なメロンにナイフをいれて山上の饗宴は文字通り盛んであつた。

三田さんも大変満足げにうかがわれた。

すばらしい展望にパチパチとシャッターを切ったあげく、フィルムとの交換のやり方がわからないでうろちろしている名カメラマン、いつ描いても富士はむづかしいと嘆いているのはかくい筆者、そういう取り巻きから超然として、水割りのウィスキーを手に、じつと眼を閉じている三田さんの胸中を推測することはできないが、「そのカヤトの山頂で仲間達と富士を眺めながら盃を挙げて村尾君を偲びたい」

と矢倉岳への並々ならぬ慕情をよせている「底倉記」の一節からすればその一端をうかがうに難くはないように思われた。

右に引用した文中の村尾君とあるのは、シンガポール時代の飲み仲間、本会々員であった故村尾金二氏のことである。

十二月一日、一行、三田幸夫、島田 巽、河野幾雄、小原勝郎、小原晴子、太田敏、金坂一郎、織内信彦

土曜会へのお誘い

土曜会では「ノースランド」が不思議と芳香を放つ。二級とは思えない、と目を細めながら水割りや傾け、土曜日の午後、ルームの応接室では談笑がはずんで、深更におよぶことも年に何回かはあ

土曜会の歴史は長く、神谷恭氏、足立源一郎氏等が常連になっておられた最盛期には毎週盛会を極め、「神谷バー」の観を呈したとは語り草になっているのだが、土曜会を愛された多くの方が故人となられた今、新しい人たちにも土曜会の存在を知ってもらおうとは前々から話されていたことであ

った。土曜会は登山の傾向性をもった閉鎖的な集りでないとは言ってもない。ヒマラヤもあればウラヤマもいて、山と日本山岳会が好きでたまらないという会員誰もが持っている性向の人が顔を出すところなのである。会の伝統が身に沁みこんだ古い会員の方々から木暮氏や田部氏の回想が話され、活字にすれば外交上物議をかもしかねないネパールの生ま生ましい政治情勢や登山情報も語られ、登山史の問題点が組上にのせられる。枯淡な随筆の滋味に触れる思いがして、それが右からも左からも聞こえてきて、会員であることの幸福感に陶酔することもある。刺戟をうけないわけにはいかなないのである。帰る時は充足した気持を抱いているのが土曜会なのである。ノースランド、ダブル100円。ツマミは各自持参。水だけでもOK、コーラ類もおいてある。山に行けない事情があって、口惜しい思いをしている土曜日は、この楽しいサロンでウサを晴らされるこ

図書



紹介

ギネス登山事典

エドワード・パイアット著

近ごろわが国でも話題にのぼる英国のギネス・ブックが、山と山登りの特集本を刊行した。特集シリーズでは十八番目だそうで、著者は英国山岳会、アルパイン・ジャーナルの現役編集長である。

ベストセラー好みの出版なので、本の造りは一般向けを狙わねばなるまいから、二五六ページのうちの約四分の一におよぶ入門記事とか、水準のまちまちな写真の挿入とか、戸まどいを感じさせる一面が、本書を手にして先ず目につく。

他方、記録の集成を表看板にしているシリーズだから、山と登山活動の記載については、全力を傾けたにちがいない……と読者としては期待する。A Jの編集長が乗り出しているのだから、信頼したくもなろう。

それら主題を扱う本書の四分の三は、世界を九地域に大別した山岳事典で占められている。

その編集方式は、一ページの左側に山群別に主要ピーク名、高度(メートル)、初登頂の年月日と人名(女性の登頂も随処に記す)を、ずしりと並べ、ページの右側には、その山群の略図と、主要ピークとその登頂にまつわる話題を掲げるといふ調子である。そして、山群、山名、人名等は巻末の索引で、それぞれ検出することができる。

興味のありそうなページを開いてみると、英国や西欧の登山家の足跡の及んでいる地域では、初登攀の記録など詳しく拾われており、ヒマラヤなども、ざっと見たところでは、まずまずの出来栄である。しかし、ヴァリエーション・ルートからの登頂などは、いろいろな制約のため省略されて、古典的な記録だけなので、物足らずと思う向きもあろう。

日本の項目では山城別の山名の記載はかなり詳しいものの、富士山をはじめとする山々の解説は、いささかお粗末にすぎるといえる。

富士山頂に仏教寺院があるというのとはともかく、「モンブランより一〇〇年前、西暦六六三年に初登された」という記述は、いかなる資料にもとづいたものか。女人禁制の山へ最初に登った女性には「*Barbet*」となつてはいるが、明らかに英公使ハリー・パークスの夫人を誤記したもの。他に言及されてい

る山々も御嶽、立山、浅間山、阿蘇山、桜島、明神礁、と火山を主とした六座だけなのは情けない。これらの点を見ると、かなり地域によって精粗の差がありそうに思われるので、それを承知の上で便覧に使う程度のものである。

The Guinness Book of Mountains & Mountaineering: Facts & Feats, by Edward Pyatt, Guinness Superlatives Ltd., 1980, p. 256, £ 8.95.

(島田 巽)

足で歩いた百観音

神谷 恭平著

著者は本会名誉会員故神谷恭氏の息子さんである。といってもすでに還暦を迎えたご年配の方だが、どういわけか本会に入会されたのは遅く、五一年九月のことだそうである。しかし山登りは新ハイキング・クラブに所属され、古くから父親じこみの山に親しまれていた。

本書は、新ハイキング・クラブのプランで、秩父札所めぐりに参加したのが機縁となり、十年間をかけて日本百観音めぐりをめめた結論、多忙な仕事のあいま、しかも病氣とも戦いながらまとめたもので、すでに「新ハイキング」誌上に発表された十二篇と、新しく加筆した未発表の十六編をあわせたものだといふ。「西国三十三観音」、「坂東三十三観音」、「秩父

と出席者全員がすすめている。
 地方会員の方は水割りは一杯だけタダで歓迎するという慣習ができてきた。上京の折は是非地方の空気をルームに吹きこんでいただきたいと出席者全員がのぞんでいる。

55年7月から11月までの出席者ノートに記帳されている方は次の通り。なお、この時期、女性の名前が見えないが、大歓迎されることはつけ加える必要もないことかもしれない。
 (菅野弘章)

松田孝一 松本熊次郎 山崎金次郎 鶴岡元之助 山崎安治 野口未延 高橋照 関根吉郎 金坂一郎 神谷恭平 渡辺兵力 宮下啓三 飯野亨 織内信彦 島田巽坂本正智 原田幹市 沼倉寛二郎 早乙女綾次 岡沢祐吉 綱倉志朗 谷口現吉 浜野吉生 関塚貞亨 長谷川恒男 田辺主計 入沢郁夫 菅野弘章 尹官炳 砂田定夫 中川武 片岡博 池元善秋 山本良三 小野利次 折井健一 国見利夫 堀内章雄

北の山雄感

登坂 信雄

昨年夏の夕張岳行で北の山の花の三大拠点である大雪・礼文・夕張を五年目ではなし、これで黄水仙花・礼文草・夕張草の代表的な名花にお目にかかれたわけだ。昭和五年頃の飯豊の稜線はお花島が延々と続き、惜し気もなく踏

み倒しながら進んだものだったが、昨今あの一帯には一本の花もなくなっている。幸い北の山には今でも花の大群落が各所にあり心ゆくまで花をめで、あわせて過ぎにし山旅の追憶にふけることができる。

緯度からすれば当然だが、礼文島では近くの海中の巨岩上からすでに花が認められ、波打ち際からとだえることなく山上へと続いている。島を横断する林道が生れ、車で行けるためか花泥棒が出没し始めたが、夕張岳には一個の空罐すらない清潔さで、地元の営林署や山岳会の御努力には本当に頭がさがった。

夕張岳の登路は五・五キロと短いが相当の急坂であった。山麓の植物類が東北の山と似ており内地の山かと思った程だが、杉とブナだけは全くない。夕張営林署江沢技官(夕張岳の花の権威者)の案内のお蔭で実に詳細な説明をうけ賜ることができた。

六月下旬が盛期だが昨年の夏は遅れ、訪れたのは七月十三日であった。(礼文・利尻も六月下旬) 沢山の珍種があるので案内がなければ眺めるだけとなるので注意願いたい。

七合目には氷河の痕跡と伝えられるガマ岩の巨岩がある。故武田久吉博士がこの岩場に立たれた折、あまりの珍種の豊富さに感嘆のうめき声をあげられた由であ

三十四観音」の三章からなり、一番那智山青岸渡寺から始まって、文字通り足で歩いた百観音めぐりである。十年間の巡礼行は実りの多い旅であり、すばらしい安らぎを与えてくれた。と著者はあとがきに述べている。
 昭和五十五年四月一日、新ハイクン社発行、二三〇ページ、定価一七〇〇円
 (山崎 安治)

高い山々と冷たい海

—H.W.ティルマン評伝—
 J.R.L.アンダーソン著

私達にマナスルと言う素晴らしい贈物を届けたティルマンは、戦前からナンダデヴィの登頂者として、また画期的なヒマラヤ軽装遠征の創始者として高名だったが、五十半ばに高度への体力の限界を卒然とさとり海洋に転じてそれ以来三十五年、毎年両極圏に自らヨットを乗り入れ八十歳を間近かに遂に南極の海に果てる(一九七七年)という、その壮絶な人生の全貌についてには知られていなかった。評伝の著者はティルマン晩年の友人だった職業作家であるが、彼に自伝の執筆を勧め断わられたのが、没後伝記を書く機縁になった。ティルマンは山について七冊、海に八冊の達筆の本を書いているのでそれで十分だと

考えたのだろうか、「文章に抑制が利き過ぎて真相が伝わらない恨みがある」と言うタイムズの批評は大なり小なり何れの著作にも当てはまり、目立つことを極端にきらった内向的な人物だっただけに、他人によって伝記が書かれねばならなかった必然がやや遠まわりだが先ず語られている。

伝記はその人の生い立ちと生涯の精神的支えとなった姉、肉体で生きる意味と生死観を教えた十代の戦争体験、アフリカでの十年の開拓民生活、シブトンとの運命的な邂逅と彼によるヒマラヤへのいざない、父からの遺産、中央アジア・カラコラム・ヒマラヤ・天山での広い足跡、バルチザンとして戦った第二次大戦、晩年の海洋の航跡等と年代順にしかも縦横に叙述しているが、生涯のどのひとこまも、英国とその殖民地支配の時代風景のなかに画かれ、業績も古典的な探険家、航海家とのさりげない対比のなかに客観的評価を受けているので、読者は知的な滋養をたっぷりあたえらる。

しかし何よりも興味深いのはどの章からにもじみ出てくるティルマンの人間像だ。「普通の人には山や海は冒険心をいやす一時の訪問先だが、彼にとってはそこは定住の地だった」。文明の利器を捨てての肉体で苛酷な自然にじかに接することをその人生の主題、終生

の生甲斐としたティルマンにとって、粗食耐乏の軽装遠征やラジオと救命具の持ち込みを許さなかった航海は所詮望ましい人生そのものの姿だった。山にしても登頂よりもそこに至る行程が精神に充実を与えるものだった。不屈の登山家ではあったがその本質は、ヘロドトスのごとく癒されることのない好奇心をもつ永遠の旅人だった、と画かれている。その深い人柄はどの社会・仲間からも尊敬されたが、女嫌い(この謎は解かれていない)と世間嫌いが実生活におこす波紋はほほえましく時には哄笑さえ禁じ得ず、読者は西欧文明のアンチテーゼともいえるべき枯れ切ったこの人物に知らずして惹かれていた自分を見出すことだろう。終章にティルマンに傾倒したACの会長ピーター・ロイドのティルマン観が長く引用されているが、期せずして含蓄に富んだ登山史論にもなっていて読みごたえがある。

評伝を訳出すれば多くの楽しい話題を提供することだろう。

High Mountains & Cold Seas
 A Biography of H.W. Tilman
 J.R.L. Anderson
 London Victor Gollancz Ltd.,
 1980.

(田口 二郎)

る。

蛇紋岩の砂礫中にユウバリコザクラ・ウラジロキンバイ・フタマタタンポポ・エゾクモマダサ・ミヤマムラサキ・エゾツガザクラ・イワベンケイ等が咲き競いその見事に全く感動した。

一昨々年ベテガリ岳の帰途望月前副会長も来山されたとのことだったが、夕張炭坑の縮少で熊が激増したことも耳にした。

北の山で最も不安なのは熊だが(礼文島には熊と数はいない)、真黒な熊より毛皮が赤茶

けているか、あるいは白い斑点のあるやつの方が物凄く狂暴だと言われている。

夕張岳の山小屋に進む途中路傍に熊や狐が出て来て車と競争することもあると江沢氏は語ってくれた。

夕張を終って私は更に愛山溪から忠別岳

へ、そしてトムラウシ温泉まで足をのばしたが、姿見の池付近のお花畑にはミネゾウ・イワブクロ・メアカンキンバイ等が一面に咲いていた。しかしコースにはロープが張りめぐらされていて、何か北の山にそぐわない気がした。

愛山溪とトムラウシの両温泉は山また山の奥にある理想の山の出湯であった。最も強くひかれたのはあたりを取りまく物凄い大樹海



で、堂々たる巨木は昼なお暗い密林を形成し、北の山の森林美とスケールの大きさをまざまざと見せてくれた。

冬が来るとこの大樹海は見事なクリスマスツリーに一変する。低温のため葉についた雪が何日間も消えずメルヘンの世界を実現してくれる。乾燥するので樹氷は育たないが、冬の方が夏よりも数段まさり、この夢の国を車でとばす気分は最高と言ってよい。

ここ数年私は年末年始を勇駒別温泉で過ごしている。

雪質が最高なのと混み合わず山スキーには最高の練習場となるからである。

「北海道で滑ろう」の合言葉で航空会社の宣伝も盛んなようだが、スキー場の施設の点で内地並なのは北の峰と札幌周辺程度で他は相当地に劣る。また内地で

常時標高二千程度を滑っている、北海道の雪質が無上最高だと特別扱いする必要があるような気がする。日本海の影響を受ける小樽あたりまでは内地の標高のある所と大差なく、有名なニセコですら秋田や青森よりかなり劣ることを知っておきたい。

それでも雪の良さを切実に感ずるのは旭川周辺の大雪や十勝岳で、更に道東の川湯まで進むと反

対にぐんと悪くなる。

旭川周辺で接した零下三十四度は内地の零下二十度と同程度と考えてよく、湿度の少ない関係で内地の高所の如く両脛がつくという状況はほとんど起こらない。しかし気温が三十度以下に下がる雪の表面が小さな粒状に氷結してしまい、滑り出すと板が雪中につきささって快適な滑降は得られなくなる。この傾向は無樹帯の十勝岳で特に顕著となるのに対し、森林帯の勇駒別あたりでは首までもぐってもボーゲンが切れる。

・「山岳」追悼欄について

新刊の「山岳」75年所載の物語会員のなかに永年会員の斎藤兵三郎(三二)、山井基福(九四一)の両氏の名が見えるが、追悼欄には何の記載もない。これには私も無関係ではないので、そのことを少し書いておきたい。

お二人の追悼文について編集スタッフのF君から相談をうけたとき、誰かに書いて戴くのが適当か実は私にも十分知識がなかった。そこで斎藤さんについてはF君から直接遺族に書面を呈して、略歴でもお願いしてみたらと思見を述べたが、そのお返事は得られなかったという。

昨今の勇駒別はコースを設けローラーをかけるので滑降の興味は半減した。解決策は導標に頼らず各自好みの斜面を選ぶ滑り方をすることである。

高い旅費を使って遠くまで出掛

雪の八子ガ峰で忘年会

十二月十三日(土)の昼過ぎ、白いもののちらつく茅野駅に顔を

自然保護委員会

揃えた一行は、まず駅前で昼食をとることにした。

ん、相川修さんをお願いしてましたが、北大山岳部OBではなかったせいもあり遂にわからず終いだった。やむなくご遺族に私から一書を呈してお尋ねしたが、同様何らお返事は得られなかった。

山井さんには、同氏が永年会員になられた昭和五十年の年次晩餐会でお目にかかったことがある。

右様の次第で追悼欄に載らなかったが、万一会員中にご存知の方があつたら、ご執筆をねがいたく、また右のお二人以外にも、未だ追悼欄にとりあげられていない最近の物語会員につき、ご執筆いただきたいと思うものである。

(望月 達夫)

お知らせ

・第26回山スキー

技術講習生募集

これから本格的に積雪期のスキー登山を志す方を対象にしたスキー技術講習会を企画致しました。

春の安定した天候のもとに、山スキーの基礎技術から始め、飯豊の二王子岳のスキー登山を行います。

講習会は各参加者の山歴とスキーの経験や希望に従って班編成をし、講師にはヒマラヤ等の海外登山の体験者で山スキーの経験豊富な者を予定しています。

懇親の意味を含めての講習会ですので、男女を問わず多数参加していただきたく、ご案内申し上げます。

日程 昭和56年3月20日(金)22日(日)

場所 飯豊連峰 二王子岳(一四二一)を中心とした春山スキー登山。

行程 3月19日(木)夜行で出発、3月20日(金)新発田駅前集合、バスにて南俣、スキーにて一王子の小屋に入る。午後基礎技術練習、夕食後ミーティング

3月21日(土)二王子岳の分散スキー登山、夕食後懇談会

3月22日(日)午前中スキー練習、午後下山(現地解散)

費用 一人 15000円

(宿泊・保険等費用)

交通費、食費は各自負担

申し込み方法 日本山岳会事務局で電話にて受付けます(二六―四四三三) 電話受付後申し込み書を送付します。

参加者説明会および準備会

昭和56年3月6日(金) 山岳会

主催 指導・遭難対策委員会

共催 越後支部

・山岳図書を読むタベと

山岳史懇談会のお知らせ

恒例の右の会を左記によって開催いたします。気軽にお出かけ下さい。

▽第十二回山岳図書を語るタベ

イタリアの山の本のことなど

日時 3月10日(火)午後6時より

場所 本会ルーム

▽第九回山岳史懇談会

大正時代の積雪期剣岳、槍、穂高登山の話

日時 3月30日(月)午後6時30分より

講師 三田幸夫氏

場所 本会ルーム

図書委員会

折しも食堂のテレビでは、その

日、スキー場開きで賑わっている

車山高原のようを放映している

た。私たちは予想外の雪のはやさに

喜んで、心配したりした。

七人が二台のタクシードに分乗し

て、夢科登山口に向かい、昨夜に

降り積もったばかりの新雪の中に

降り立った。まずスパッツをつけ

る大先輩の島田さんを見て、私は

自分の不用意を恥じた。女ノ神茶

屋の裏から登りにかかる。さらさらした雪に足をとられて、何とも

歩きにくい。

稜線に出るとかなり強い風が吹

いていた。先頭を行く木名瀬さん

がふり向いて「耳がちぎれそう

だ」と言う。そう言いながらも、

この冬、初の雪山を楽しんでいる

ようだ。それほどキャリアも気

構えもない私は、ほどなく前方に

ヒュッテ・アルビレオの三角屋根

が見えて来なかったら、寒さと歩

きにくささで弱音の一つも吐いた

ことだらう。小屋の戸を開けて入

った瞬間、心底からほっとした。

年長の島田、織内さんらが平然と

雪を払っている様子に、さすがと

思った。

冬場は予約客だけということ

で、小屋主の梶さんの心づくしの

夕食は、馬刺しのおでん、味噌汁、

生野菜……。それに関塚さん持参

のローストビーフが現れるという

豪華版だった。

吹雪の中をかっさあげた清酒・

ウイスキーの類いもふんだんにあ

った。日頃、謹厳な自然保護のメ

ンバーでは飲みきれないのではな

いかと心配したが、島田、国見、

木名瀬さんらを筆頭に、みんなも

思わず盃を重ねて、ランプの灯り

の下、楽しい話題がいつまでも続

いた。

外は零下十度という山の夜

を、私たちは豆炭の行火の入った

布団にもぐりこんで、ぬくぬくと

眠った。渡辺さん愛用のホカロン

を島田さんも使ってみようという

ことだったが、あとで聞くと紙袋

をもみすぎて中の鉄粉をこぼして

しまったとか。

翌朝も、まだ粉雪が降り続いて

いた。この分では予定していた夢

科山登山はおろか、ヒュッテから

見渡せるという日本アルプスから

八ヶ岳へのパノラマも望めそうに

ない。

とにかく親湯まで下ろうという

ことで、十時半に小屋を出る。昨

会務報告

1月理事会

1月12日午後6時30分

本会ルーム

出席者 西堀会長、折井副会長、

中川、川上、越田、岡沢、山口、

中村、鈴木、高橋、嵯峨野、大森

各理事、小原(○)、鳴原各監事、

山崎、村木、小原(●)、金坂各評

日、難渋したのが嘘のように、一

気に女ノ神茶屋まで下った。雪の

斜面をバックに記念写真をとって

から、親湯に向かって歩きはじめ

た。

途中、テルモスの紅茶をわけあ

って小休止しただけで親湯には寄

らず、バス停の近くで昼食をとっ

た。そこでまた、お喋りに興じて

いる間に迎えるタクシード到着。

茅野駅では十六時三十五分の

「あずさ」まで時間があるという

ので、駅前の喫茶店に入って恒例

のコーヒードを飲む。自然保護の山

行では、どこへ行っても最後はそ

の土地の洒落た店で一息入れて散

会というのが常だったが、松本と

違って茅野の街には、いかにも駅

前食堂然とした店しか見当らなかつたのは残念であった。

(近藤 緑)

参加者 織内信彦 島田 巽

木名瀬 亘 渡辺正臣 国見利夫

関塚貞亨 近藤 緑

議員

委任 渡辺副会長、中島、飯野、

高本、小倉、菅沢各理事

◎審議事項

▽「山岳」20年の「冬の朝日岳」

沼井鉄太郎氏他5点を東大山の会

創立50周年記念文集中に掲載する件

承認

▽日大ヒマルチュリ登山隊(一九

八一年 隊長橋本健)推薦 承認

▽ソ連「パールキャン」交換登

(著者寄贈)

- 7 藤木高嶺「カナダエスキモー再訪」立風書房 1980 (著者寄贈)
 8 大木操「激動の衆議院秘話」第一法規 昭55 (著者寄贈)
 9 都岳連史編集委員会「東京都山岳連盟史 1980」東京都山岳連盟 昭55 (版元寄贈)
 第13 回山岳図書交換会買上り図書
 1 日本山岳会 1970 年エベレスト登山隊「1970 年エベレスト登山隊報告書 第I部 登山報告」日本山岳会 1972
 2 同上「同上 第II部 学術報告」日本山岳会 1972
 3 高田光政「登頂あと 300」二見書房 昭40
 4 本多勝一「知られざるヒマラヤ」角川書店 昭33

- 5 安川茂雄、白簾史朗「アフガニスタンの山旅」あかね書房 1966
 6 H. ハラー著 横川文雄訳「白いくも」二見書房 昭41
 7 W. ノイス著 進藤純孝訳「冒険・この駆りたてるもの」荒地出版社 1960
 8 今西錦司「遊牧論そのほか」秋田屋 昭23
 9 宮柴二監修「校註 北越雪譜」野島出版 昭45
 10 佐藤貢「アルプスの主・嘉門次」朝日新聞社 昭38
 11 泉靖一・梅棹忠夫監修「ガネッシュの蒼い氷」朝日新聞社 昭41
 12 J. ダンシー著 広瀬玲子訳「女だけのヒマラヤ」人文書院 昭34

山についての協議書 承認

◎報告事項

▽次年度新役員(理事、監事)推薦については二月五日(木)評議員会を開催する

▽読売日本スポーツ賞がチョモランマ登山隊におくられる。1月24日正午、会長が出席する。

▽大野氏未亡人より2万円の寄付あり、会から山岳2冊を贈った。

▽昭和56年度事業計画、予算案を2月理事会までに各委員会は提出してほしい。

▽財務担当の飯野常務理事が福岡に転任したが、今期中はそのままだとしても、実務については来期理事になる方によってもらう。

▽集委員会 1月14日(水)18日(日)八方尾根、中大山荘においてスキー懇親会を行う。

▽遭対、指導委員会 3月にスキー講習会を行う。

▽図書委員会 「山岳図書を語るタペ」2月14日の予定を3月10日(火)に変更する。「山岳史懇談会」第9回大正時代積雪期登山三田幸夫氏

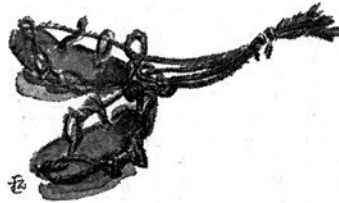
▽会報編集委員会 支部長会議に出た問題はいまま順調にやっている。会報に載せやすく枚数、締切等守ってもらいたい。

▽婦人懇談会 忘年会を12月19日(金)に行う。ソ連のモナルティスキー氏も出席して盛会だった。ガルワル報告書出上る。セミナー

1を2月、3月続ける。
 ▽青年懇談会 12月20日(土)忘年会を行う。2月7日(土)8日(日)に丹沢寄小屋で猪鍋の会を行う。

▽科学研究委員会 1月24日(土)25日(日)裏磐梯の国民休暇村を利用して磐梯山に登る。

▽海外連絡委員会 12月10日ソ連パミールキャンプ村長モナルティスキー氏来日、一九八一年に日本



を

山岳会長を招待したい。また日本山岳会の推せんする人を招待したい。交通費自弁、ソ連の滞在費はむこうもち。一九八二年はソ連から日本に登山家をよこしたい。理事会としてはやる方向で決定。ビデオカセットをシャープより寄贈された。

▽フィルム、ビデオの管理は図書委員会とはかなり異質なので担当委員会を設けたい。

▽郵便代が値上げになったので今後会費値上げ問題を理事会のもう

ルーム日誌

(55年12月)

2日(火) 婦人懇談会

4日(木) 総務委員会

5日(金) 学生部雪崩講習会

8日(月) 理事会

9日(火) 婦人懇談会

11日(木) 科学研究委員会

12日(金) モナルティスキー講演会

15日(月) 図書委員会

19日(金) 忘年会

20日(土) 青年懇談会、婦人懇談会セミナー

会員移動(12月)

今月の来室者410名

物故

一六九一 吉阪 隆正 (12・17)

支部変更

四六五四 小方 全弘 (静岡→東京へ(昭和56年より))

永年会員

一一七一 山口 健児

一一七六 山田 二郎

一一〇五 長島 春雄

一一二〇 水越 誠一

一一二七 島田 翼

一一四七 中屋 健次

一一五七 加藤 泰安

一二五九 水野祥太郎

一二六三 中村 勝郎

名誉会員

一〇六八 交野 武一

一一三一 堀田 弥一

ヨーロッパ・アルプス・オートルート大募集!!



Air France

“エールフランスで行く”ヨーロッパアルプスシリーズ

★オートルート大募集(各15名 ガイド同行)

4月25日(土) 16日間 ￥498,000

ツァモニ〜ツェルマット〜ザスフィ完全走破(上級者向)

4月25日(土) 12日間 ￥468,000

ベルビエ〜ツェルマット間(中級者向)

モンブラン登頂

4月25日(土) 16日間 ￥483,000 募集7名

株式会社マウンテン・トリップ

(運輸大臣登録旅行代理店業第2809号)

〒150 東京都渋谷区渋谷3-14-4

服部ビル3F

TEL: (03)407-0484(代表)

担当: 藤原

図書受入報告

図書委員会

昭和55年9月受入図書(つづき)

- 9 中国登山隊編「Planting the Five-Star Flag on Mt. Tomur」外文出版社 1979 (中国登山友好代表団/中国登山協会寄贈) 2冊

あとがき また一人竹中昇君という若い仲間が逝った。特徴のある字で会報に寄せてくれた真摯な彼の原稿から彼の心の中を覗くことはできなかったが、JACの中に身を埋め込み、憑かれたように山登りを追いかけていた、君の丸くなった背中が思われる。(O)

昭和五十六年二月二十日発行

102 東京都千代田区四番町五十四

サンビュウハイツ四番町

発行所 日本山岳会

発行者 西堀栄三郎

編集代表 岡沢祐吉

電話東京(03)四四三三

振替口座東京三十四八一九番

印刷所 東京都港区赤坂一丁目三番六号 株式会社 技報堂

- 10 人民体育出版社編「中国の登山運動」外文出版社 1964 (中国登山協会寄贈)
11 中国希夏邦馬峰科学考察隊編著「希夏邦馬科学考察図片集」科学出版社 1966 (中国登山協会寄贈)
12 J.R. Cox "Classics in the Literature of Mountaineering and Mountain Travel from the Francis P. Farquhar Collections of Mountaineering Literature" Univ. of California Library 1980 (購入)
13 W. Flaig "Silvretta" Werkstätten Rudolf Rother München 1975 (宮下啓三氏寄贈)

昭和55年10月受入図書

- 1 家庭画報「名峰百景」世界文化社 1980 (版元寄贈)
2 群馬県ヒマラヤ登山隊「峭峻の白き尾根」群馬県山岳連盟 1980 (八木原園明氏・宇部とり氏寄贈)
3 松山商科大学山岳会「青き未踏峰・ニルギ! 中央峰 6940 m」松山商科大学山岳会 1980 (版元寄贈)
4 葛山朝三「私の山歩き」日本随筆家協会 1977 (著者寄贈)
5 葛山朝三「山との対話」日本随筆家協会 1979 (著者寄贈)
6 近藤等「アルプスを描いた画家たち」東京新聞出版局 昭55